

初年次教育における多様性に向き合うか

課題研究担当理事

山田剛史

【企画趣旨】

少子化に端を発する人口動態の変化や AI に代表される産業構造の変化が急速に進み、予測困難な時代を生きるこれからの大学生には、在学中に様々な力を身につけておくことが求められている。こうした社会変化を受け、大学教育改革においても3つのポリシーを軸に据えた教学マネジメントの実現、教育・学習方法としてのアクティブラーニング(AL)の推進が強く求められている。実際、様々な調査からもALの実施率は上昇している。初年次教育においても、少人数のクラス編成でALを取り入れた形で授業がデザイン・実施されているケースが多くみられる。その中で、高校から大学への移行を円滑にするべく、アカデミック・スキルやソーシャル・スキルといった力の涵養が目標に据えられている。また、組織的な質保証を担保するための戦略・方略として、共通シラバスの策定や共通教材の利用等も展開されてきた。

初年次教育は、2000年代以降急速に拡大し、既に日本の大学教育のスタンダードとして定着するに至っている。一方で、この急速に進む社会変化に、今の初年次教育は十分に対応できているだろうか(出口から見た初年次教育)。また、近年、初等・中等教育においても大学入学者選抜改革や学習指導要領の大幅な改定の中で、「主体的・対話的で深い学び」(大学で言うところのAL)や「社会に開かれた教育課程」の実現、「総合的な『探究』の時間」や「GIGA スクール構想(一人一台端末の実現)」等、大学入学前の学習者の経験やスキルが大きく変わってきている。この入学者の変化を適切に把握した上で、初年次教育が展開されているだろうか(入口から見た初年次教育)。このような問題意識を背景としながら、初年次教育を次の段階に進めるための課題研究として「多様性」の問題に着眼し、ここに焦点化したシンポジウムを企画した。

多様性はこれからの時代に不可欠かつ極めて重要なテーマである。これまでの初年次教育がどちらかと言うと標準化に軸を置くものだったように思うが、今後はこの「標準性」と「多様性」の両軸から考えていくこと(どう調停するか)が重要になってくると考える。とは言え、一言に多様性といっても様々なトピックが存在する。ここが焦点化されず多様性という言葉だけが独り歩きしているようにも感じる。そこで、本シンポジウムでは、発達障害学生／障害学生支援(片岡美華氏)、グループワークが苦手な学生／キャリア教育(山本美奈子氏)、さらに様々な教授・学習観を有する教員／ファカルティ・ディベロップメント(FD)(井下千以子氏)といった3種の対象者・教育支援領域の観点から多様性を捉え、アクティブラーニングをキーとしながら初年次教育の現状や課題に迫りたい。

【開催報告】

各シンポジストによる報告の詳細については、当日の発表資料やこの後に続く本巻の各報告でご覧いただきたい。各報告を踏まえて、筆者がモデレーターのもと、パネルディス

カッションを行った。以降はパネルディスカッションでの議論を中心に整理する。

片岡氏(鹿児島大学)に対して、(1)まず、諸外国と比較した際の日本の大学における障害学生の現状(割合等)と障害者差別解消法施行以降の動向について伺ったところ、絶対数としてはまだそう多くはないが、2019年度には1.17%(2014年度調査の2.6倍)と増えてきていることが分かる、と回答された。(2)次に、障害学生支援センター等の学生支援部署と教学部署とがどう連携を取っていけば、多様性を阻害することなく、円滑な初年次教育の実現につながるかという質問に対して、合理的配慮によって各大学ではガイドライン等が整備され、支援センター等を経由することで権利を行使しやすくなったことに加えて、学生が「自分には〇〇といった特徴があり、〇〇といった支援をお願いしたい」といった書面(氏名等の記載はなし)を教員に直接渡す等、学生本人の自主性を重視して教員や支援者が関わるあり方(医学モデルから教育モデル)にシフトしてきているのではないかと、そうすることが大切なのではないかと、との発言があった。(3)最後に、特別支援教育の観点から、初年次教育に期待されることは何か、という問いに対して、小中高と学校段階が進むにつれて理解が薄れたり支援が途切れたりする傾向があることから、初年次教育の中で自己理解やキャリア教育を含めた「学び直し」の機会があること、ひいては共生社会とはどういうことなのか等、全体の理解の促進やそのための教育を行うことが大切ではないかと、等の意見があった。参加者から、「合理的配慮をしていることを、他の学生にどう伝えるか。ややもするとひいきや不公平感を抱かれてしまわないか。実践的な知恵はないか」といった質問があった。片岡氏からは、これは大学だけではなく小学校等でもみられることで、合理的配慮に関する知識があったとしても、ひいきや不公平感を抱くことについては発達段階があると言われている。そのため、小学校低学年では難しいが、大学生であれば教える(該当学生がいないところで教育する、広くアナウンスしておく)ことでそうした感情を低減させることはできるのではないかと、との回答があった。

山本氏(山形大学)に対して、(1)まず、多様な学生特性(グループワークが苦手な学生)に合わせて初年次キャリア教育の開発を行うことによって、他者と向き合い関わるという経験やそこでの経験を踏まえたスキルの獲得の機会を失ってしまわないかと問うたところ、他にも他者と向き合い関わる科目(「スタートアップセミナー」等)は用意されていて、複合的に学ぶことで自己理解や他者理解を促すことができるようになっている、との回答が得られた。(2)次に、「書くこと(文字)」を軸にキャリア教育を展開することが難しい学生特性(発達障害等)もあるのではないかと、といった質問に対して、卒業研究・論文や就職活動におけるエントリーシート等書くスキルは不可欠になるため、どうしても難しい場合は配慮することになる、と発言された。(3)最後に、多数の初年次キャリア教育を設けているが、その理由と目標ラインはどこにあるかといった質問に対して、山形大学の場合、7割ぐらいの学生が下宿しているということや、コミュニケーションが苦手と感じている学生が相当数いるということ等からも、地域社会に目を向けて、他者との交流を通じて、社会的な自立のためにどう学んでいくのかが初年次のキャリア教育で目指していることになる、との回答があった。上記の「書くこと(文字)」について、発達障害・ユニバーサルデザイン(UD)の観点から配慮しておくべきこと等はあるかという質問を片岡氏に投げかけたところ、書くことは「継次処理」(情報を一つ一つ順番に考えて、理解する認知特性)にあたり、それが得意な学生もいれば、図やグラフ等から理解する「同時処理」(情報を全

体で捉えて、部分同士を関連付けて理解する認知特性)が得意な学生もいる(カッコ内は筆者補足)。そのため、両方に目を向けた教材や評価の方法を取り入れていくこと、また、一つの科目だけではなく、そうした特性を有する学生の力を発揮できる科目はここにあるよといったことが明確であれば良いのではないかと、との発言があった。

井下氏(桜美林大学)に対して、(1)まず、アカデミック・プランニング(2回)とキャリア・デザイン(3回)の授業デザインは魅力的だが、特に(批判的)思考力の育成は大変ということを踏まえて、理想的なプログラムはどのようなものかについて伺ったところ、この2つの前に「論証型レポートを書く」(6回)を取り入れており、「調べること(情報を収集すること)」や、批判的検討に基づき「情報を判断すること」を重視している。特に、これからの社会では、色んな情報が渦巻く中できちんと情報を判断していく力が重要になってくるので、最近の初年次教育では特に重視している、と回答された。(2)次に、当該授業(ライティング教育)の高年次への影響・効果について伺ったところ、ライティングは自分の思考を表すツールだと考えているため、「てにをは」を直したりはせずに、「構造」をどう組み立てていくかといった指導を行っている、それが高年次へと繋がる、と話された。

その他、参加者からも様々な観点からの質問があり、積極的な意見交換がなされた。本シンポジウムでは、直接的にコロナ禍の問題は取り扱わなかったが、当然のことながら此度のコロナ禍下で導入された遠隔授業等が初年次教育・初年次学生にもたらした影響は大きい。今回の多様性の問題と重ね合わせながら、コロナ後の初年次教育や学生支援(障害学生支援、キャリア支援、学習支援等)についても引き続き丁寧に議論・検討を行っていく必要があると強く感じる事ができた。